



TITLE:

漢代蒼頭考 : 批判

AUTHOR(S):

宇都宮, 清吉

---

CITATION:

宇都宮, 清吉. 漢代蒼頭考 : 批判. 東洋史研究 1935, 1(2): 101-116

ISSUE DATE:

1935-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/138684>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二卷  
第二號

昭和十年十二月發行

漢代蒼頭考

——批判——

宇都宮清吉

## 序

支那社會史上に於いては昔から現今の學問上我が國で奴隸即ち英語の Slave 又獨乙語の Sklave の譯語に當る階級に對して一般に奴婢と言ふ言葉を用ひて來た。奴隸と言ふ言葉も無いことはないが餘り慣用はされなかつたのである。初學記であるとか太平御覽、文獻通考、古今圖書集成等と言ふ本には奴隸に關する記述に題するに何れも奴婢の語を以つてしてゐる。漢代に於いても詔勅等の用語は必ず奴婢と言ふ言葉が用ひてある。梁啓超氏が中國奴隸制度（清華學報第二卷第二期）に於いて漢代の奴隸解放に關する詔勅を殆ど用ひられてゐない。たゞ鄭玄が周禮秋官司寇の朝士の條のかへて奴隸と言ふ語は漢代では殆ど用ひられてゐない。たゞ鄭玄が周禮秋官司寇の朝士の條の

凡得獲貨賄人民六畜者。委于朝。告于士。旬而舉之。大者公之。小者庶民私之。

と言ふ文の人民と言ふ語に註を施して

人民謂刑人奴隸逃亡者。

と言つてあるのが僅かに一例あるに過ぎぬのである。本年十月二十五日の夕、東洋史研究の發刊の祝賀と創刊號の批判の會が行はれたが其の席上二三子から拙稿「漢代大私有地に於ける小作者と奴隸の問題」に用ひてある小作者或は奴隸と言ふ用語の當否に就いて質問があつた。小作者と言ふ用語に就いては私は別に不適當とは思はない。奴隸と言ふ言葉に就いては私は折を得て漢代に用ひられた奴隸を意味する言葉たとへば奴婢、臣妾、家僮、又家童、僮又童、或は豎、臧獲等と言ふものに就いて考證を加へて見度いと思ふ。これ等の言葉は等しく奴隸の意味を示すものとして用ひられてはゐるが、それ／＼特殊な起源と變遷を持つてゐるものであつて従つて言葉に特有なニュアンスとでも言ふ可きものがつき纏つてゐる。而し大體に於いてその概念は現今學術上用ひる奴隸に適當するものであることだけは確實であるから私は彼の拙論中に於いてもしばらく別段の考證を用ひずして、一概に現今の學術語たる奴隸の語を用ひた次第である。而し私は前に言つた様に其等の語に就いて考證す可き用意を有してゐるから將來それを發表する時があると思ふ。此の蒼頭考も會つて提起された一説に對する一批判であると共に、又右の一部として草するものである。

—

漢代の史書に多く出て來る蒼頭或は倉頭と言ふ語は何の意味であるか。これに就いては已に志田不動磨氏がその色々な意味で有名な「晋代の土地所有形態と農民問題」(史學雜誌(四十三卷))と言ふ論文に於いて倉頭と言ふのは蒼頭と書くのが正しく漢代では一種の奴隸であるが主人の私兵として軍に従へる者であり、頭には青幘を著けたので蒼頭と言はれたのであるとなし、更に歴史學研究誌上に於いては漢代の奴隸制度「蒼頭」に就いてと言ふ一論文に依つて元來蒼頭は戰國、秦漢の際に於いては主人旗下の軍隊であり比較的親近なる者、信頼に値する者、郷黨の青年を以て組織せられてゐたが身分的には決して初めから奴隸ではなかつた。然るに漢代平和の續くと共に是等の蒼頭が貴族邸で雜役に奉仕するに至つて

次第に奴隸的境涯に陥つた。而し本來の軍人としての性質は失はれなかつたから蒼頭はその屬性として武技に熟練した驍勇の人たるを要した。而して斯くの如く蒼頭は奴隸として使役される様になり従つて奴隸と同じ様に又賣買されたけれども、主人の側近に奉仕し軍役に服するものであるから本人の功勞や勤務の誠直の爲めに一般奴隸に比して良民と爲る機會が相當恵まれてゐたと考へられる(第二卷第一號)と考證された。私は氏の此の興味ある考證に就いて、猶充分了解出来ない點が二三ある様に思ふので、次に其を記述して先達の高教を仰ぎ度いと考へる。先づ(A)戰國秦漢時代の蒼頭軍の性質に就いて考へ次に(B)蒼頭奴隸の起源と其の變化を考へ、ついで(C)漢代「一般に通行」した蒼頭の語が決して別個の奴隸制度を意味するのではなくして單に奴の一異稱として行はれたものであることに就いて考へて見度いと思ふ。

蒼頭なる語は一番先に戰國策魏策に出て来る。蘇秦が魏の襄王に説く所で

今竊聞大王之卒武力(史記作士)二十萬。蒼頭二十萬。奮擊二十萬。廝徒十萬。云々

と言つてあるのがそれである。高誘はこれに何も註を施してゐないので高誘の考へが判らないのであるが、史記の蘇秦傳には魏策と同一文を載せてあり、索隱は註して謂以青巾裹頭。以異於衆。とある。次には秦二世皇帝の元年末から二年初にかけて殆ど時を同じくして東陽の令史の陳嬰と言ふ者がその地の少年に擁立せられて蒼頭(一軍)を起し又陳勝の部下の呂臣と言ふ者が新陽に蒼頭軍を組織したことが史記漢書に出てゐる。所で魏の蒼頭軍とはどんな性質のものであるかと言ふに、これは疑もなく魏の國軍であつて決して私兵ではない。而してこれと並び存する武力或は武士は、荀子や漢書の刑法志に武卒として表れてゐるもので、その精銳にして且つ重武裝の軍隊であつたことは有名である。此の武力或は武士又武卒と言ふのは恐らく魏の常備國軍として、民衆より選拔され且つ訓練を施された魏國軍の主力たる勇武の軍隊であつたと思ふ。それに對して蒼頭軍は恐らく武力軍よりは輕裝の且つ平素それ程訓練されぬ豫備軍的のもので、事ある時呼集して編成せられる庶民軍の一種であると考へられる。司馬貞の索隱には前記の様な註が施してあるが「青

巾して衆に異らしめる」と言ふ意味は何であらうか、恐らくこれは青巾であると言ふことが獨特なその軍隊の徽章であつたと言ふことであらう。而して巾と言ふものは居士野人の著けるものであるから青巾を著けると言ふことは輕裝兵團の最も簡單な目印であり、且つ其の事自身が魏國蒼頭兵の階級的出自を物語つてゐると思ふ。即ち魏國蒼頭軍の特徴は(A)戰時に急呼集せられる豫備軍的庶民兵であること、(B)その制服は青巾して獨特の徽章としたことであらうと思ふ。

而して秦漢の際陳嬰が東陽で、又呂臣が新陽で、各々組織した蒼頭軍も大體將軍が或る地方で蜂起する爲めに、其の地方人を至急に軍隊に編成したもので、その組成分子も先づは土着の庶民であつたと見る可く、此の點では魏の國軍である蒼頭軍と、私兵である陳嬰呂臣の蒼頭軍は共通のものがあると考へられる。而し注意す可きは陳嬰呂臣の時代には、彼等と同様に他に於いても亦大小の群雄が雲の如く起つたと言ふことで、これは史記漢書に載せられてゐる通りである。そしてその軍を提げて立つ情況は多少の差はあれ、皆各々の地方に於いてその地方人を急據集結して軍を編成したものであつて、彼等はそれ／＼自己の軍隊を他と區別する爲めに獨特の徽章を必要としたであらう。漢の高祖はその旗幟を皆赤色にして立ち、その配下たる少年豪吏等は沛の子弟二三千人を率いて高祖と共に出陣した。<sup>(6)</sup>この赤は漢兵の徽章である。後代漢の軍人は赤幘すると言ふ規定があつた。<sup>(7)</sup>恐らく沛公獄起の時から傳統であらうと思ふ。されば陳嬰呂臣の蒼頭軍も又必ずや斯る特種なる徽號の意味を持つてゐたものでなければならぬ。陳嬰の軍隊が蒼頭したのは何の爲めであるかはその異軍蒼頭特起<sup>(8)</sup>と言ふ六字の中に説明しつくされてゐる。即ち蒼頭であると言ふことによつて他の同時的に蜂起した群雄の軍隊と自己を區別せん爲めである。應劭は赤眉の例を引いて「陳嬰の部下が己れ等の軍隊を衆、即ち、他の群雄の軍隊と區別せん爲めに士卒皂巾を著け青領以つてその目印としたのである」と言つてゐるのは史記の文章を正解したものである。果して、然らば當時蒼頭軍と言ふものは決して群雄の間に侍衛軍たる印として一般に流行したのではなくて却つて陳嬰の軍隊に獨特のことであつたと解しなければならぬ。少くも陳嬰を擁立した東陽の少年達

には蒼頭が自分達に獨特であつて決して他と紛れる恐れなしと確信出來たことに違ひなからう。若し是を「主人麾下の軍隊であり比較的親近の者信賴に値する者郷黨の青年を以つて組織せられた軍隊」と概言してしまふなれば當時の諸群雄は概ねその様な性質の軍隊を統率してゐたのであるから、従つて又概ね蒼頭軍と稱した筈であり、史記が獨り陳嬰の蒼頭に限つて異軍蒼頭特起した、と傳へてゐるのは意味を持たないことになるであらう。私は蒼頭軍とは決して侍衛軍隊の一般的總稱ではなくて陳嬰呂臣に限つて起つた特殊な徽號の稱であると思ふ。然らば陳嬰と殆ど時を同じくして起つた呂臣の蒼頭軍は、蒼頭軍が侍衛軍の總稱であると言ふ一般的性質から當然に名づけられたものではなくて、これは全く偶然な出來事としてその結果を陳嬰のそれと等しくしたものと思ふ。同じ社會に生活する人間が同じ様な思想傾向を有し同じ様な行動（表現形式）傾向を有するのは當然なことで、呂臣の蒼頭と陳嬰のそれを偶然事的一致と解したからとて決して不合理ではなからう。呂臣は陳涉世家の記載によれば新陽に起つたのであるが、新陽は汝南の縣名であつて此の汝南は戰國の時代には魏に屬してゐたことは戰國策や蘇秦の傳<sup>⑫</sup>を見ても明らかなことであるから、呂臣は恐らく自分が新陽で組織した軍隊が魏の曾つての蒼頭軍に近似してゐるので、その名を採つて付けたのではなからうか。これは單なる想像に過ぎぬけれども蓋然性はあるだらう。

以上の如くであるから私は、當時群雄の侍衛の軍隊が何れも蒼頭軍と呼ばれたと言ふ記録も勿論ないのみか斯る道理はあり得ないと考へる者である。果して然りとすれば漢代に於ける奴隸の一稱呼としての蒼頭の淵源を、極めて特殊の軍隊の名稱である蒼頭に求めやうと言ふことは可成り危険ではないかと思ふ。少くとも軍隊に於ける一般的術語であつた部曲の名稱が私兵一般の意味に轉化し、ついで六朝隋唐代に於ける如く賤民の一種になつたと同様に、此の特殊の名稱たる蒼頭軍が漢代の奴隸の意味する蒼頭の前身であることは出來ない様である。蒼頭軍の蒼頭なる意味には本來一般的汎稱的なものが拒絶せられてゐるのである。又此の蒼頭が一般的汎稱的な意味に轉化した經過を示す様な痕跡

もないと思ふ。陳嬰や呂臣は後に漢の高祖に従つて諸侯に封ぜられてゐる。已に高祖に従つたなれば當然已れに獨特であつた蒼頭と言ふ徽號は否定せられて、漢の徽號たる赤を奉ぜざるを得ないであらう。これ蒼頭の語が私兵一般に對する稱呼に轉化したと言ふ痕跡をも發見し得ないとする所以である。

註① 史記卷六十九蘇秦列傳。

② 史記卷七項羽本紀曰。陳嬰者故東陽令史。居縣中。素信謹。稱爲長者。東陽少年殺其令。相聚數千人。欲置長。無適用。乃請陳嬰。嬰謝不能。遂彊立嬰爲長。縣中從者得二萬人。少年欲立嬰。便爲王。異軍蒼頭特起。云々。漢書卷三十一項羽列傳。略同史記。

③ 史記卷四十八陳涉世家曰。陳王故涓人將軍呂臣爲倉頭軍。起新陽。漢書卷三十一陳勝列傳。略同史記。

④ 荀子卷十議兵篇に魏氏武卒以度取之。衣三屬之甲。操十石之弩。負服矢五十个。置戈其上。冠軸帶劍。贏三日之糧。日中而趨百里。中試則復其戶。利其田宅……とあり漢書刑法志にも同一文が載せてあり魏が國を傾むけて維持した精銳で齊の技擊、秦の銳士と共に有名であつたことが記してある。曰く魏惠以武卒奮。秦昭以銳士勝と。又若齊之技擊。得一首則受賜金云々と。裴駰は蘇秦傳の集解に魏の武士軍を此の武卒に比定してゐる。蓋し正鵠であらう。

⑤ 戰國、秦漢の蒼頭は後漢末の注家たる應、服（イ應說。史記項羽本紀集解所引及び漢書陳勝傳註。服說。同上漢書陳勝傳註）は何れも青幘したとは書かず青巾或は皂巾したと註してゐる。韋昭（史記陳涉世家）や晉灼（史記項羽本紀）は青幘したとは註してゐるが、青幘としてゐないことは同一である。後漢書第九十八卷郭泰傳に李賢は周遷の輿服雜字を引いて巾以葛爲之。形如幘……。本居士野人所服。魏武造幘。其中乃廢……とあり、後漢書輿服志下には古者有冠無幘とあり漢代通行の幘は孝文帝の時に至つて形をなしたとあるから後漢末に於ける戰國魏の蒼頭軍や陳、呂の蒼頭軍に對する注家は恐らくこのことを考慮して敢て青幘とせずして漢時一般に庶人の間に行はれた「巾」の青色のものを頭につけたのである、としたものらしい。今假に後漢時の注家たる應劭、服虔の説に従つて青巾したものと考へておかう。

⑥ 史記卷八漢高祖本紀曰。〔沛〕諸父老皆曰。平生所聞劉季（高祖字）諸珍怪當貴。且卜筮之。莫如劉季最吉。於是劉季數讓。衆莫敢爲。乃立季爲沛公。祠黃帝。祭蚩尤於沛庭。而擊鼓。旗幟皆赤。由所殺蛇白帝子。殺者赤帝子故上赤。於是少年豪吏如蕭曹

樊噲等皆爲收沛子弟二三千人。攻胡陵方與…………。

⑦ 後漢書卷四十輿服志下に武吏常赤幘。成其威也とあり。

⑧ 史記項羽本紀前引條參看。

⑨ 後漢書卷四十一劉盆子傳に赤眉の赤眉たる所以を傳へて樊崇恐其衆與(王)莽兵亂、乃皆朱其眉。以相識別。とあり。

⑩ 史記項羽本紀注應劭曰蒼頭特起言與衆異也。蒼頭謂士卒阜巾若赤眉青領以相別也。

⑪ 史記卷四十八陳涉世家の裴駰集解に徐廣の説を引いて新陽を汝南の地名としてゐる。これには異説はない。漢書地理志參看。

⑫ 今史記卷六十九蘇秦傳の文を引いて置かう。蘇秦又說魏襄王曰。大王之地南有鴻溝。陳。汝南。許。鄆。昆陽等々云々。戰國

策策又同様文あり。

⑬ 北平清華學校研究院發行。國學論叢第一卷第一號所載。何士驥氏論文。部曲考參看。

⑭ 漢書卷十六、功臣表第四參看。

## 二

然らば漢代の蒼頭は一體何によつて起つて來たのであるか。三國魏の孟康は

黎民黔首。黎黔皆黑也。下民陰類。以黑爲號。漢名奴爲蒼頭。非純黑。以別於良人也<sup>①</sup>

と言つてゐる。勿論これは滑稽に近い附會説と言ふ可きである。而し彼が漢では奴のことを一般に蒼頭と言つたとしてゐることは或る意味では正しいと思ふ。漢書後漢書その他漢代の文獻上蒼頭が奴の意でない場合は一に述べた所を除いては絶無である。而し志田氏が已に注意してゐる如く漢人は決して奴を名づけて始めから蒼頭と言つたのではなく、正に始めは、後述する様な一種の奴隸のみに名づけられたと思はれるものが、後には奴の一般的呼稱に轉化したものと見られるのである。然らば蒼頭が奴の一般的異稱として用ひられる様になつた所以は何であるか。それには先づ蒼頭その



ものゝ起源を考へねばならぬ。

漢書の鮑宣の傳を見ると前記孟康の註に引續いて臣瓚の註が引いてある。臣瓚は漢儀注を引いて

官奴給書計。從侍中已下爲蒼頭。青幘

と言つてゐる。漢儀注と言ふ本は應劭によつても已に引用せられてゐるが一説によるとこの本は後漢の衛宏の漢舊儀のことであると言はれる。此の説を唱へた人は漢儀注は漢儀の注の本であると考えへるが加藤繁博士は漢の儀注と言ふ本であつて漢儀の注ではないと言はれてゐる。<sup>⑤</sup>何れにしても已に應劭が引用してゐる以上は漢代の官制等を記した貴重な遺文であることに相違はない。故に其の記事は信用するに足るものであるが之を今日永樂大典中より再録された漢舊儀<sup>⑥</sup>(即ち衛宏の傳によると前漢の雜事を記載した所の書)<sup>⑦</sup>に比すれば臣瓚の引用した漢儀注の文とは多少異つた點を發見するのである。曰く

官奴擇給書計從侍中以下。爲蒼頭。青幘。與百官從事。從入殿中。省中待使令者皆官婢。擇年八歲上。衣綠。曰宦人云々と。<sup>⑧</sup>即ち漢舊儀の文の方がより精しく且つ誤解を起す恐れがない。そこでこれに據つて考ふるに漢では官奴の中から書計の事に従つたり侍中に從屬してゐる者を選擇して倉(即ち蒼)頭となし青幘せしめ百官に從つて之と共に殿中に往來せしめ、省中で使令を待つものは官婢の中から八歳以上のものを選んで綠の衣を着せたのである。されば少くも西漢代の官奴の中には自ら蒼頭と呼ばれたものと然らざるものが存したことが考へられる。従つてその限りに於いて西漢代の蒼頭と言はれる可き奴隸は右の様な服裝をした官奴のみであつたと言はねばならぬ。然るに應劭はその著風俗通義に西漢代の遺令と思はれるものを引いて

尙書御史臺皆以官倉頭爲史。主賦舍。凡守其門戶。<sup>⑨</sup>

と言つてゐるのであるが此の官倉頭の意は一應は不明であると言はねばならぬ。何となれば蒼頭とは漢儀注や漢舊儀の

文によつて考へれば本來官奴の中から選擇された者であるから、之に官の字を冠することは意味をなさぬからである。蓋し思ふに應劭は此の法文引用に當つて觀念の混淆を來したものであらう。應劭に於ける此の種の過謬は他に例なしとはしない。例へば漢代では奴隸の異稱として臧獲と言ふ言葉が用ひられてゐる。これに就いて應劭は漢書司馬遷傳に於いては揚雄の方言を引いて

海岱之間罵奴曰臧。罵婢曰獲。燕之北郊民而豎婢謂之臧。女而婦奴謂之獲。

と言ひ風俗通義に於いては

臧者被臧罪。歿入爲官奴婢。獲者逃亡獲得爲奴婢<sup>⑪</sup>

と言つてその意見に統一のないことが示されてゐる。恐らく此の種の觀念上の不統一性が官倉頭と言ふ言葉の上にも表れて來たのではあるまいかと私かに思ふ。それ共鴻儒應劭には何の罪もなく只後人誤つて官字を挿入したのであるかも知れぬ。

さて右の様に西漢代の蒼頭したる奴隸は書計に従事したり、侍中以下の百官に従屬して殿中に往來する以外、應劭に従へば尙書や御史臺にも從屬してゐたのであり、西漢代官廳に於ける此の種蒼頭したる奴隸は相當の數に上つたと思はれる。西漢の官制を略受繼いだ東漢に於いても此の事は大體同じであつたらう。そして彼等は其等の官廳に於いて常に百官連の使役に従ひ密接なる交渉を有してゐたから蒼頭の語はいつしか先づそれ等百官連によつて頻繁に用ひられる様になり、尋で官私に關らず奴の形容詞として蒼頭奴と言ふ語が生じ、更に奴婢一般に押し擴げられた形容詞として蒼頭奴婢と言ふ言葉も生れ、再轉して單に蒼頭と言つても直ちに官私に關らず奴隸<sup>(男)</sup>が意味せられるに至つたものであると考へられる。前漢書の王嘉傳に

董賢有賓婚及見親。諸官並共。賜及倉頭奴婢。人十萬錢<sup>⑫</sup>

とあり、これは蒼頭と奴婢の二名ではなくて蒼頭奴婢と一名に訓ず可きは霍光の傳に霍去病の孫雲の暴狀を記るして雲當朝請。數稱病私出。多從賓客張圍。獵黃山中。使蒼頭奴上朝謁<sup>⑬</sup>

と言ふ用ひ方があることでも解る。これは雲の代理として蒼頭奴を上謁せしめるのであるから勿論一人であつて決して蒼頭と奴とを上謁せしめたのではないのは明かである。文類も是れに註して

朝當用謁。不自行。而令奴上謁者也

と言つてゐるのは正しい解釋である。而して霍光傳の蒼頭奴（宣帝代）は年代的には勿論董賢の蒼頭奴婢（哀帝代）より前にあるものであるが、史書に於ける此の兩者の現れ方の先後は偶々以つて蒼頭と言ふ語の用ひられ方の變遷の跡を示すものゝ様である。蒼頭奴婢と言ふ語は後漢書にも一ヶ所用ひてある。後漢書の明帝八子の傳中梁節王暢の傳に

臣暢小妻三十七人。其無子者。願還本家自選擇。謹勅奴婢二百人。其餘所受虎賁官騎及工技鼓吹蒼頭奴婢兵弩厩馬。皆還本署云々<sup>⑭</sup>

とありこの蒼頭奴婢も蒼頭と奴婢ではなくて恐らく漢舊儀や漢儀注に規定せられてゐる様な官奴隷であらうと思ふ。此處に於いても蒼頭は奴婢の形容詞と考へてこそ、正しく理解されやう。

而して上述した様に蒼頭の語は已に宣帝時代には霍氏の如き高貴の家には私奴として服役して居り蒼頭奴と呼ばれ、又董賢の様な貴倖の家に限つて用ひられ始めてゐる。これは恐らく當時是等高貴な臣に對しては、例を擧げるまでもなく屢々奴婢の賜與があり、それは大概官奴婢であつたし、又當然斯の種の蒼頭も多かつたであらうから、自ら私有に移されてからも猶舊によつて蒼頭奴、蒼頭奴婢と呼び習はされたものと思はれる。又當時は官奴婢が時價で賣り下げられることもありし故此の事などが蒼頭の語が單に官奴全體の呼稱たるに止まらず、次第に私奴の呼稱へも移行して來る楔機となつたものと思はれる。而して後漢代になると蒼頭と言ふ語の意味は、いつの間にか完全に擴大せられて官私を問

はず奴を指して斯く言ふことになつたのである。前漢では蒼頭奴、蒼頭廬兒、蒼頭奴婢の語は存するけれども未だ何れも形容詞的用法の域を出てゐない。「蒼頭」と言ふ洗練された形は後漢に至つて頻出する。そして形容詞的用法としての蒼頭は却つて殆ど見當らなくなる。暢王傳の用例等が殆ど唯一であらう。

服裝の點でも已に官私に關らずに行はれる蒼頭奴婢等と言ふ用ひ方が、蒼頭とは必ず青幘す可きものである、と言ふ特殊の官制の存在を無視したもので、元來の制服から言へば蒼頭は男子の官奴隸に限る可き呼稱なるにも關らず、私奴及び婢一般にまで擴張して用ひてゐるのは、次第に青幘が必ずしも蒼頭の必要條件ではなくなつて來たことを示してゐるのではないかと思ふ。このことは蒼頭奴婢と言ふ様な言葉が用ひられ始めた前漢の末哀帝の頃から次第に起つて來たであらう。そうして後漢になると最早や完全に青幘の有無は問ふ所でなく一律に男性奴隸は即ち蒼頭と呼ばれた様である。樂浪の彩篋家から發掘された漢篋に畫かれてゐる李善の像は後漢書の傳によれば元來蒼頭たる身分で、且つ此の畫像は蒼頭としてその主人の遺兒に仕へてゐる姿を畫いたものであるが別に青幘らしいものを著けてはゐない様である。此の篋に畫かれた畫像の内男性の像は相等の位のある者は何れも冠を着けてゐる。位の無い者は渠孝子と李善だけと思はれるが、これは冠を着けてゐない。而し何か頭髮の部分に着けてゐる様であるが、これは婦人畫像の頭髮の部分に畫いてあるのと同じもので恐らく頭髮の亂れるのを防ぐ爲めの道具であらう。巾とか幘とか言ふ形の物ではない様である。渠孝子は吉川氏の考證によれば蕭廣濟孝子傳中の邢渠のことであるが此の人は家貧なる爲め傭になつた人である。<sup>(21)</sup>傭と言ふのは賃労働者であつて決して奴隸ではない。漢書陳勝傳に陳勝少時嘗與人傭耕とありて顔師古は之に

傭耕謂受其雇直而爲之耕。言賣功傭也

と言つてゐる。此の様に賃錢を受けて労働する者は兩漢の史料に多く現れてゐる。後漢書李燮傳には酒家傭の語あり、同書吳祐傳には客傭の語あり又同じく夏馥傳には治家傭と言ふ語がある。何れも賃労働者と解するより他ない様である。<sup>(22)</sup>



(八四第版圖戲所塚篠彩浪樂)

部一ノ面側長ノ他クジ同ハ下部一ノ面側長一ハ上  
ルレマ讀ト子孝渠・家大善・善李・婦孝ハ字文

而して此の傭たる渠孝子と蒼頭なる李善とには頭部に關して何等の相異も示されて居ないのは少くとも此の畫像の出來た頃には蒼頭奴隸は名は蒼頭と呼ばれても實際には青幘などを着けなかつたのであつて蒼頭は全く一般的な奴の異稱と化してしまつてゐたことを暗示してゐると思はれる。斯様に後漢時代には蒼頭は極めて普通に奴隸の異稱として用ひられる様になつたから此の時代或はそれに近い時代の註家は蒼頭とは即ち自明的に奴隸で

あるとして深く注意せず偶に孟康の様に之を其の起源に溯つて説明しやうとすれば前に引いた様な附會の説を出す様なことになるのであると思はれる。又應劭の前引文に傳寫の誤りなしとすれば彼の鴻儒猶官倉頭等と言ふ語を、然も曾つての西漢の法文であつたと思はれる文の中に用ひるの過誤を犯してゐるのであると思はれる。

註① 漢書卷七十二鮑宣傳注。

② 歷史學研究第二卷第一號、漢代の奴隸制度「蒼頭」に就いて。

③ 漢書卷十一哀帝本紀に應劭は任子令のことに就いて漢儀注を引用してゐる。

④ 四部備用本漢官六種中漢舊儀序目の文參看。

⑤ 加藤繁博士。漢代に於ける國家財政と帝室財政上の註參看——東洋學報第八卷——

⑥ 四庫全書總目提要參看。

⑦ 後漢書卷百九下衛宏傳參看。

⑧ 前掲漢舊儀下(四部備要本)。

⑨ 後漢書卷三十六百官志の御史中丞條所引逸文。

⑩ 漢書卷六十二司馬遷傳參看。

⑪ 初學記卷十九奴婢條所引逸文。

⑫ 後漢書卷八十六。王嘉傳。

⑬ 漢書卷六十八霍光傳。

⑭ 後漢書卷八十。明帝八王傳參看。

⑮ 漢書卷七十七母將隆傳曰。傳太后使謁者。買諸奴婢。賤取。……………隆奏言買賤。請更平直云々。とあり、これは婢に關するものであるが奴の場合でも勿論同様であつたと思ふ。

⑯ 漢書卷七十二鮑宣傳曰。蒼頭廬兒皆用致富。非天意也とあり。

⑰ 前引王嘉傳及漢書卷九十三董賢傳參看。

⑮ 朝鮮古墳研究會編の樂浪彩箋冢によれば此の冢は後漢末期前後のものであり(頁一一〇)此の漢僅に畫かれてゐる人物は概ね漢人に熟知せられた孝子烈女の類である。(吉川幸次郎氏樂浪出土漢箋圖像攷證頁八)

⑯ 後漢書卷百十一。李善傳曰。

李善……本同縣李元蒼頭也。建武中疫疾。元家相繼死沒。唯孤兒續始生數旬。而賞財千萬。諸奴婢私共計議。欲謀殺續。分其財產。善深傷李氏而力不能制。乃潛負續。逃去隱山陽瑕丘界中。親自哺養乳爲生運。推燥居溼。備嘗艱勤。續雖在孩抱。奉之不異長君。有事輒長跪請白。然後行之……。光武詔拜善及續並爲太子舍人。云々

⑰ 前掲樂浪彩箋冢。吉川氏樂浪出土漢箋圖像攷證二頁。

⑱ 前掲書に吉川氏は太平御覽卷四百十一に引かれた蕭廣濟の孝子傳を採録してゐる。曰く邢渠失母與父仲居。性至孝。貧無子。備以給父云々。

⑲ 漢書卷三十一陳勝傳參看。

⑳ 後漢書卷九十三李燮傳曰。(王成)將燮。乘江東下。入徐州界內。令變名姓爲酒家傭。

㉑ 後漢書卷九十四吳祐傳曰。時公沙穆來遊太學。無資糧。乃變服客傭爲祐賃春云々とありこれも賃錢を受ける勞働者である。客も賃労働者として用ひられることが多い。

㉒ 後漢書卷九十七夏馥傳曰。(夏馥)自剪變形。入林慮山中。隱匿姓名。爲治家傭。云々。

㉓ 蒼頭が奴の一異稱と化してから、始めてこれに精しい註を施した人は孟康である。其の他の學者は蒼頭軍が何であるかに就いては種々の説明を試みてゐるが――一の註⑤參看――所謂蒼頭に就いては餘りに自明的に奴隸の異稱であつた爲めでもあらうか之に註を施す必要を感じなかつたものゝ様である。却つて後の時代蒼頭の語が餘り用ひられなくなつてから始めて之に註する學者が出て來た。例へば臣瓚であるとか李賢の如きは其れである。臣瓚の説明は私奴たる蒼頭の説明にはなつてゐない。李賢は後漢書の光武帝本紀上の蒼頭の條下に、秦呼人爲黔首。謂奴爲蒼頭者。以別於良人也。と註してゐるが、これは孟康あたりの謬説に禍ひされ更に秦始皇が人民を黔首と呼ぶことにしたと言ふ史記の始皇本紀二十六年の記事――更名民曰黔首――等に附會して斯る興味ある説を出したものと思ふ。

## 三

以上の如くであるから蒼頭と言ふものは必ずしも武藝の熟練者である必要はない。又當時の奴隸はその職分として武器を持つて主人の爲めに近侍しその邸宅を警固することは當然なことであつた。有名な王褒の僮約にも

犬吠當起驚告隣里。振門挂戸。上樓擊鼓。持盾曳矛。環落三周。勤心疾作云々<sup>①</sup>

とあるし漢書の何並傳にもその彼に従つてゐた騎奴が刀を帯びてゐたこと記され戰役にも勿論従つたのである。而し奴隸としては斯様に武藝が出来ることも有難いが平時では事に従つては謹慎に主人には従順な者が一層有難いだらう。應劭の風俗通義(逸文)によれば「河南平陰の龐儉と言ふ人が謹慎にして任を屬するに足る蒼頭を市場で買はんとして六十歳になる老蒼頭を求め家畜農業を主らせた。云々」<sup>④</sup>と言ふ話が載つてゐたのである。同じ風俗通義の逸文に陳國の公孫志節に地餘と言ふ十七歳になる蒼頭ありこれは武藝は出来なかつたが書疏に工であり君子の風格があつた。<sup>⑤</sup>漢代の奴隸で文字を知つてゐると言ふことは決して珍らしいことでない。官奴の中には書計に従ふものあり、<sup>⑥</sup>又僮約にも奴は須く書削代牘ゆべきもので新しい木簡など用ふ可きでないと言ふことが書いてあるのは一般に奴の教養中文字を知ることのそれ程珍らしくない例であらう。又志田氏は蒼頭は一般奴隸に比して良民となる機會に恵まれてゐたと考へられるが李善が一躍官吏になつたのは武藝が出来る爲めではなくてその奴隸精神の發揚の爲めであつたし<sup>⑦</sup>宦官に買はれた蒼頭はその子と爲つて後には傳國襲封の公子となつたがこれも武藝によるのではない。宦官達の野心に依るのである。奴隸の女を母に持つた衛青は、人奴たれば答罵されないだけでも有難いと言ひつゝ幸運にも名將となつた。<sup>⑨</sup>而し衛青の頃には未だ蒼頭の語は奴の同義語としては用ひられてゐなかつた。斯様に漢代の奴隸や蒼頭と言はれるものが解放されて良人となつたことは往々見えるけれども蒼頭と奴婢とではその解放に難易があつたとは思はれないのである。衛青の解放さ



れ方と李善の解放され方にそれ程違つたものは見られない。いづれも專政權又は主人の恣意に依るだけである。最後に奴隸は一般に蒼頭と異稱される様になつてからもそれ以前も餘り價格の上に差はなかつた様である。僮約中の奴は萬五千錢<sup>⑩</sup>であり風俗通義(逸文)の龐儉の買つた老蒼頭は二萬錢<sup>⑪</sup>だつた。僮約の奴と龐儉の蒼頭の能力と任事の種類には何程の差もない。五千錢の差は奴と蒼頭の差を示すものではなくて他の事情に因るものであらう。漢代の普通の奴隸の價格は大體これ位の所を上下したものだらうと思ふ。

註① 初學記卷十九引用文參看。

② 漢書卷七十七何並傳參看。

③ 史記卷一〇七に吳楚七國亂の時灌天は二人の兵士と從奴十數騎で吳軍中に突撃した。と記されてゐる。

④ 太平御覽卷四百七十二人事部富下所引。風俗通曰。河南平陰龐儉……流傳客居廬里中。鑿井得錢千餘萬。遂富。儉作府吏躬親家事。行求老倉頭。謹信屬任者。年六十餘。直二萬錢。使主牛馬耕種。云々。

⑤ 太平御覽卷五百人事部奴婢所引風俗通……又曰。將作大匠陳國公孫志節有蒼頭地餘。年十七。情性聰惠儀狀端正。工書疏云々。

⑥ 漢書鮑宣傳に引用の漢儀注の文(前出)參看。

⑦ 後漢書李善傳(前出)參看。

⑧ 後漢書卷百八單超傳曰。(宦官等)養其疏屬。或乞嗣異姓。或買蒼頭爲子。並以傳國襲封。云々。

⑨ 史記百十一衛青傳。

⑩ 初學記卷十九奴婢項下僮約曰。資中男子王子淵。從成都安志里女子楊惠。買夫時戶下髡奴便了。決賣萬五十。云々。

⑪ 前掲書參看。

## 漢代蒼頭考補遺

漢書蕭望之傳(卷七十八)に

〔王〕仲翁至光祿大夫給事中。……出入從倉頭盧兒。

と言ふことが出てゐる。これは霍光が政柄を秉つてゐた昭帝宣帝の間のことと思はれるが(同傳參看)此の倉頭盧兒は仲翁が光祿大夫給事中として従へてゐるもので、正に漢舊儀に規定文のある官奴に當るものと考ふ可きであらう。顏師古はこれに、皆官府之給賤役者也。と註してゐるが漠然たる言であるけれども、略當を得てゐると思はれる。ただ蒼頭が官奴の特種なるものであることに考へ及んでゐないのは物足りぬ感がある。

以上蒼頭考起草の際の不注意に依り言及す可くして言及しなかつた史料に就て補足を試みておく。(宇都宮)